

蘭学資料の三字漢語についての考察：明治期の三字漢語とのつながりを求めて

著者	朱 京偉
雑誌名	国語研プロジェクトレビュー
号	4
ページ	1-25
発行年	2011-03
URL	http://doi.org/10.15084/00000560

蘭学資料の三字漢語についての考察

—明治期の三字漢語とのつながりを求めて—

Three-Character Sino-Japanese Words in Written Documents of Dutch Studies

朱 京偉 (ZHU Jingwei)

北京外国語大学 (Beijing Foreign Studies University)
国立国語研究所 (NINJAL) [2009.10–2010.10]

《要旨》現代日本語で行なわれている三字漢語の造語パターンは、明治初期にすでにできあがっていたとみられる。三字漢語の造語パターンがいつできたかという課題を抱えて蘭学資料を調べてみると、蘭学者達が蘭学書の翻訳において、漢籍の造語法の影響を受けながら、後部一字語基の役割を充実させ、三字漢語の造語法を形作っていった事実が見えてくる。蘭学時代にできた三字漢語の造語パターンがそのまま明治期に受け継がれ、新しい後部一字語基の増加もあって、三字漢語による造語が和製漢語の一大特徴となった。

Abstract: Given that the word formation pattern involving three Chinese-characters that is actively used in contemporary Japanese was already attested in the early Meiji period, the question arises as to exactly when it was created. This question is answered by investigating documents written by Japanese scholars of Dutch studies in the Edo period, who, when translating Dutch documents into Japanese, made reference to the word-building patterns of classical Chinese and created the new word structure with three Chinese characters by enlarging the usage of the one-character base that appeared at the end of a word. The three-Chinese-character word pattern thus created in the Edo period was handed down to the Meiji period, and with an increase of new one-character bases, it has become a notable feature characterizing the Japanese-made Chinese words in present-day Japanese.

1. 問題提起：明治初期の三字漢語

明治初期の資料で三字漢語の様子を調べてみると、人文科学系と自然科学系を問わず、現代日本語で行なわれているような造語パターンがすでにできあがっていたとみられる。その最大の特徴は、後接一字語基を軸に種々の二字漢語と結合することによって、多くの三字漢語を造り出しているところにある。たとえば、明治7年創刊の『明六雑誌』(1874–75)と明治5年出版の『医語類聚』(1872)をそれぞれ人文科学系と自然科学系の代表資料として、出現頻度の高い後接一字語基と三字漢語の語例をあげると、次のようになる。

◇『明六雑誌』(1874–75)の場合

—者 愛国者 改革者 開化者 奇特者 在官者 疾病者 私有者 初選者

-人	保護人	異郷人	凶悪人	自由人	製造人	代議人	読書人	社中人
-学	民種学	法律学	論理学	経済学	修身学	人生学	観念学	文法学
-論	運送論	学者論	教門論	妻妾論	攘夷論	人材論	同権論	廢娼論
-法	保護法	演繹法	婦納法	銀行法	裁判法	治罪法	分解法	教育法
-上	法律上	歴史上	民法上	交易上	財権上	社交上	精神上	政略上
-家	保護家	因循家	改革家	偽論家	守旧家	政治家	歴史家	法律家
-力	感化力	吸引力	攻守力	自然力	想像力	抵抗力	火薬力	均同力
-説	愛敵説	開化説	急進説	五行説	自然説	情實説	轉換説	秘密説
-費	葛藤費	興造費	国債費	使節費	大使費	駐劄費	駐扎費	留學費
-中	建言中	在官中	世界中	地球中	敵国中	德行中	範囲中	
-輩	怪奇輩	学士輩	頑固輩	執権輩	小子輩	婦女輩	浮屠輩	
-体	議論体	叙事体	思量体	審辯体	同一体	表明体	無機体	
-風	一般風	外国風	勤番風	君子風	西洋風	卑屈風		

◇『医語類聚』(1872)の場合

-薬	催眠薬	癩癩薬	墮胎薬	防腐薬	解毒薬	利尿薬	緩下薬	火傷薬
-炎	胆嚢炎	動脈炎	角膜炎	結膜炎	涙管炎	膀胱炎	網膜炎	靭帯炎
-病	敗血病	腸管病	乏血病	副腎病	関節病	黄胆病	流行病	皮膚病
-法	点滴法	断食法	灌腸法	水治法	外用法	聴胸法	止血法	減損法
-体	放線体	空洞体	胼胝体	乳頭体	水晶体	無機体	細胞体	線状体
-論	腸虫論	腸腺論	肝臓論	潰瘍論	膜質論	嘔吐論	生殖論	血液論
-管	測血管	導尿管	肝胆管	毛細管	泌尿管	乳糜管	輸水管	験液管
-痛	肝臓痛	涙嚢痛	膀胱痛	偏頭痛	上腹痛	心臓痛	咽喉痛	子宮痛
-膜	処女膜	骨内膜	基底膜	脈絡膜	凝脂膜	皮様膜	脱落膜	細胞膜
-学	病因学	健康学	解剖学	馬病学	舍密学	修身学	薬剂学	運動学
-素	胆液素	血紅素	血球素	軟骨素	纖維素	消化素		
-熱	胆液熱	動体熱	発疹熱	稽留熱	間歇熱	粘液熱		
-術	撥下術	墮胎術	去勢術	外科術	造頤術	造膾術		
-質	白堊質	悪液質	発酵質	灰白質	象牙質			

このような事実をふまえて、三字漢語の語構成パターンがいつ、どのようにできたかという問題を解明しようとすれば、さらに時代を遡って、幕末・明治初期の英学の前身にあたる蘭学資料を調べなければならない。本研究の目的は、複数の蘭学資料を対象に、三字漢語の形を持つ用語を最大限に抽出して、その語構成パターンや語の性質を明らかにすることである。そのため、当面、抽出した三字漢語の語源について、または、現代語での生存状況等については問題としないことにする。

2. 先行研究

本研究に直接関わる先行研究については、次の二つの側面から整理する必要がある。

2.1 蘭学資料を対象とした語彙研究

蘭学資料に注目し、蘭学者達の造語を研究し始めた歴史は1930年代に遡れるが、終戦直後に、斎藤静・古田東朔・杉本つとむ等の先学によって本格的な研究が再開され、斎藤静(1967)や杉本つとむ(1967)などが早期の成果としてあげられる。しかしその後、研究者達の注目が明治期の訳語・新漢語という新しい研究分野に転じたためか、蘭学資料を用いた語彙研究は、停滞感の強い十数年間が続いた¹。

1980年代に入ると、日本科学史研究の面で大きな進展が見られた一方、明治期新語の語源探求の必要に応じて、蘭学資料による語彙研究が再び脚光を浴びるようになった。吉田忠(1980)、佐藤亨(1980)、松井利彦(1981, 1987)、湯浅茂雄(1982)、高野繁男(1982, 1983, 1984)諸氏の論考によって、新たな研究方法が提示され、研究領域も拡大されていった。1990年代以後は、蘭学者による造語の語源をつきとめようとして、蘭学資料と在華宣教師資料の対照研究が盛んになり、これに伴い蘭学用語の語誌記述が重要視されつつある。

ここでは、本研究との関連上、複数の蘭学資料と在華宣教師資料を使って、用語の比較対照を行なった吉田忠(1980)や、『医語類聚』の訳語を対象に、語基レベルでの語構成分析を取り入れた高野繁男(1983, 1984)、および、いち早く蘭学資料と在華宣教師資料の三字漢語に注目し、一字語基の役割を検討した松井利彦(1987)諸氏の研究について、とくに注目したい。

2.2 日本漢語の語構成研究

本研究にとって、現代日本漢語の語構成をとりあげた一連の論考が重要な先行研究になる²。なかでも、野村雅昭(1974, 1978)は、性質と計量の両面から三字漢語の構成要素を徹底的に分析検討した上、多くの研究課題を明らかにした最初の論文で、多くのヒントを与えてくれた。こうした現代三字漢語の研究を出発点として、語構成や造語法の観点を取り入れながら、そのルーツを探ってみることが、本稿の目的である。

¹ 参考文献の(i)項と(iii)項を参照。

² 参考文献の(ii)項を参照。

3. 蘭学資料の選定と用語の抽出

斎藤静（1967）では、語彙研究の資料として22種の蘭学資料が掲げられている³。一方、杉本つとむ（2003-08）では、和蘭辞典類を含め50種近くの蘭学資料の引用が見られるが、引用回数の多いものは10種類前後に限られ、斎藤静（1967）の資料範囲を出ることがなかった。これによって、主要な蘭学資料についての見当が一応得られるが、筆者の場合は、研究の目的をふまえ、①時間的には、語構成の変遷がわかるように、初期の資料から後期の資料まで幅広く選ぶこと、②分野的には、三字漢語の全容がとらえやすいように、蘭学者が得意な医学と天文暦算の両分野から資料を選ぶこと、③文体的には、三字漢語の文字列が判別しやすいために、純漢文よりも漢字仮名混じり文の資料を選ぶこと、④用語の偏りや個人差に配慮して、なるべく著者の異なる資料を選ぶこと、⑤翻訳による影響が反映されやすいように、同じ条件なら著書よりも訳書を選ぶこと、などの原則に基づいて、次の7種の調査対象を選定した⁴。

表1 調査の対象資料と三字漢語の抽出語（異なり語数）

資料名	分野	文体・総字数	抽出語	版本
1798『暦象新書』志筑忠雄訳	物理学	漢字平仮名, 12.8万	36	文明源流叢書
1805『医範提綱』宇田川玄真著	医学	漢字片仮名, 4.9万	35	風雲堂蔵版
1815『眼科新書』杉田立脚訳述	医学	漢文+返点, 7.3万	147	群玉堂蔵版
1836『窮理通』帆足万里撰	物理学	漢字平仮名, 22.7万	89	科学古典全書
1851『気海観瀾広義』川本幸民訳	物理学	漢字片仮名, 17.3万	184	静修堂蔵版
1852『理学提要』広瀬元恭訳	物理学	漢文+返点, 5.1万	74	時習堂蔵版
1857『扶氏経験遺訓』緒方洪庵訳	医学	漢字片仮名, 31.7万	227	適適齋蔵版
		101.8万字	792	

このうち、『暦象新書』（1798）と『医範提綱』（1805）は早期の資料、『眼科新書』（1815）と『窮理通』（1836）は中期の資料、『気海観瀾広義』（1851）、『理学提要』（1852）と『扶氏経験遺訓』（1857）は後期の資料として、それぞれ位置づけることができ、いずれも、約半世紀の間で三字漢語がどう変化したかを見るのに最小限に必要なものと思われる。

抽出にあたって、3漢字の文字列で一つの意味的なまとまりを成し、しかも音読みするというのを前提とすべきだが、たとえば、「水溶液」は「すいようえき」と読めば漢語、「みずようえき」と読めば混種語になるといったようなケースもあるので、もとの資料で読み

³ 同書の序論 xix (p.19) を参照。これについて、斎藤氏は「これらの書類は自分が本研究の資料として用いるために多年の間苦心して求めたかなり多数の書類の中から見本として掲げることにとどめておきたい。……蘭学書類を調査すると同時に、時代はさかのぼっているが、英米独仏関係の種々なる書類をも参照して到達した結論によって断定するのである」（序論）と述べている。

⁴ 蘭学者の研究分野は近代以降の科学分類のどの種目にも当てはまらないうえ、表1の「物理学」は便宜的な分類に過ぎない。なお、広瀬元恭訳『理学提要』（1852）は斎藤静（1967）になく、筆者が自らの判断で加えたものである。

方が明示されない限り、判断が難しい。そのため、類似の用語については、細分せず漢語扱いにして作業を進めた⁵。表1で示した抽出語は、各資料で最大限に抽出した三字漢語から重複を除いて異なり語数に整理したものである。さらに、各資料の抽出語を合流させて、複数の資料に現れた同一の語について出現時期の最も早いものを残し、その他の重複の語を除去すると、全7資料から抽出した三字漢語の異なり語数(792語)を得ることができた。以下、これを検討の対象とする。

今回抽出した三字漢語を全体から見ると、すべての語が2+1型(地平+線, 固有+性)と1+2型(脳+神経, 黒+内障)という二つの構成パターンに分類できる。構成要素となる漢字2字の部分と漢字1字の部分は、それぞれ二字語基と一字語基にあたるが、後者には、「大-, 不-, 半-/ -上, -性, -期」のような、野村雅昭(1978)で論じられた接辞性のもも含まれている。また、三字漢語の語構成を考えると、二字語基と一字語基の品詞性が有用な情報になるため、それぞれの語基について、名詞性語基(N)・動詞性語基(V)・形容詞性語基(A)・接辞性語基(S)などと振り分ける必要がある。ただしこの場合の二字語基は、三字漢語の中で一つのまとまった意味単位として機能していることから、そのままの形に対して、一つの品詞性を与えるべきだと考える。たとえば、「地平線」の語構成は「地平(N)+線(N)」なので、2+1型N+N修飾関係と表記する。「固有性」の語構成は「固有(V)+性(N)」であり、2+1型V+N連体修飾関係の語として分類される。一方、「肺結核」の語構成は「肺(N)+結核(V)」なので、1+2型N+V主述関係の語になる。表2は、このような条件設定に基づいて振り分けた結果である。

表2 二字語基と一字語基の品詞性および構成パターン

	N+N	V+N	A+N	N+V	S+V	合計
2+1型	351(48.5)	344(47.5)	29(4.0)	0	0	724(91.4)
1+2型	34(50.0)	7(10.3)	21(30.9)	3(4.4)	3(4.4)	68(8.6)
合計	385(48.6)	351(44.3)	50(6.3)	3(0.4)	3(0.4)	792

()内は%

三字漢語では、2+1型と1+2型を問わず、前部分が後部分を修飾・限定する結合関係になるのが普通である。たとえば、2+1型N+N構造の三字漢語なら「神経+病=神経の病, 自然+力=自然の力」のように、あるいは、1+2型N+N構造の三字漢語なら「横+隔膜=横の隔膜, 水+蒸気=水の蒸気」のように解釈することができるので、いずれもN+N連体修飾関係になる。また、2+1型V+N構造の三字漢語なら「反射+点=反射する点, 補給+機=補給する機」のように、あるいは、1+2型V+N構造の三字漢語なら「聴+神経=聴く神経, 動+血脈=動く血脈」のように、両パターンともV+N連体修飾関係として解釈することができる。

⁵ 高野繁男(1983, 1984)では、1字漢字の語基について「和語語基」と「漢語語基」に細分されているが、結果から見ると、三字漢語の語構成にとってあまり影響がないので、細分しないことにした。

表2からは、大きな特徴が二つ見られる。一つは、N+N修飾関係とV+N連体修飾関係で構成された三字漢語が、それぞれ全語数の48.6%と44.3%を占め、ともに多い。もう一つは、2+1型の三字漢語が抽出語全体の9割以上を占めるのに対して、1+2型の三字漢語がわずか1割未満となっていることである。これをふまえて、以下は、2+1型三字漢語に重点を置き、二字語基と一字語基の性質をそれぞれ検討していきたい。

4. 二字語基の品詞性と造語力

二字語基は、前述のように、その全体を一つの意味単位とするときの品詞性を有すると同時に、これをさらに二つの一字語基に細分するときの内部の品詞構成がある。蘭学資料の三字漢語だけに終わるのではなく、在華宣教師資料の三字漢語や現代日本語の三字漢語との比較対照をするには、二字語基内部の品詞構成に踏み込んで検討してみる必要もあると思われる。そこで、2+1型三字漢語の724語について、二字語基としての品詞性ととも、その下位分類となる語基内部の品詞構成と結合関係を整理すると、表3のようになる。

表3 二字語基内部の品詞性とその結合関係

二字語基の品詞性	内部の結合関係	語数 (%)	語 例
名詞性語基 (N) 351語 (48.5)	N+N修飾関係	258(35.6)	神経 (症), 腸間 (膜), 磁石 (力)
	A+N連体修飾関係	57(7.9)	粘土 (質), 温泉 (浴), 慢性 (病)
	V+N連体修飾関係	30(4.1)	触覚 (機), 遊星 (系), 蒸気 (船)
	S+N連体修飾関係	3	無機 (体), 無色 (物), 無形 (力)
	N+V連用修飾関係	3	間歇 (性), 間歇 (熱), 雰囲 (気)
動詞性語基 (V) 344語 (47.5)	V+V並列関係	186(25.7)	飽和 (点), 伝染 (病), 分析 (法)
	V+N述客関係	88(12.2)	成形 (力), 発汗 (期), 噴火 (山)
	N+V連用修飾関係	28(3.9)	内服 (薬), 水解 (剤), 下降 (線)
	A+V連用修飾関係	18(2.5)	固結 (腫), 近視 (眼), 平行 (面)
	M+V連用修飾関係	8	複視 (眼), 相感 (力), 自鳴 (鐘)
	S+V連用修飾関係	7	可燃 (体), 可展 (性), 未熟 (期)
	V+A述補関係	9	持久 (症), 凝固 (状), 鎮痛 (液)
形容詞性語基 (A) 29語 (4.0)	A+A並列関係	25(3.5)	強壯 (剤), 粘稠 (液), 清涼 (品)
	V+A連用修飾関係	2	過敏 (証), 透明 (体)
	M+V連用修飾関係	2	自然 (症), 普通 (力)

表3によって、二字語基内部の結合関係を細かく見ていくと、いくつかの主要な語構成パターンが中核となっていて、具体的には、「N+N修飾関係」「A+N連体修飾関係」および「V+V並列関係」「V+N述客関係」に属する二字語基が、三字漢語の構成要素で81.4%を占めていることがわかる。その他のパターンは、造語数の面において少数派であるが、蘭学資料では、どのような二字語基が三字漢語の構成要素になれるかを示してくれ

たので、それなりに重要なものである。

ここで、視点を変えて、前部二字語基の実例に基づいて、その造語力を見てみよう。二字語基は、後部一字語基と結合してできた三字漢語の数が多ければ多いほど、造語力が強いと考えられる。造語数の多い順に二字語基とその語例をあげると、表4のようになる。

表4 前部二字語基の造語力

造語数	語基数	語基と語例
15	1	神経（-機, -系, -質, -症, -状, -性, -叢, -内, -熱, -病, -力）
6	1	分析（-液, -家, -機, -術, -性, -法）
5	3	揮発（-塩, -鹼, -精, -菓, -油）, 自然（-機, -性, -症, -証, -力）, 腐敗（-臭, -証, -性, -熱, -物）
4	7	焮衝（-性, -証, -熱, -病）, 形器（-学, -機, -性, -力）, 痙攣（-症, -証, -性, -痛）, 酸化（-鉛, -鉄, -銅, -物）, 胆液（-管, -質, -性, -熱）, 粘液（-状, -熱, -膜, -労）, 流動（-質, -性, -体, -物）
3	29	可燃（-質, -体, -物）, 回虫（-症, -熱, -病）, 角膜（-創, -病, -痿）, 感染, 眼瞼, 吸收, 虚脱, 凝固, 三角, 酸素, 刺衝, 蒸発, 蒸気, 蒸餾, 生殖, 舍密, 先天, 遷延, 第一, 第三, 第二, 伝染, 動物, 発汗, 玻璃, 反射, 平行, 乳糜, 流行
2	66	解剖（-家, -学）, 合併（-病, -証）, 間歇（-性, -熱）, 感受（-機, -性）, 金属, 強壯, 経験, 結核, 交感, 黒障, 集合, 衝動, 赤道, 創傷, 多血, 単純, 地球, 腸胃, 滴流, 南極, 排気, 発焰, 避雷, 腐蝕, 分泌, 補給, 防腐, 北極, 麻醉, 麻痺, 慢性, 離心, 立方, 硫黄, など
1	441	癌毒（-症）, 気管（-中）, 起動（-力）, 求心（-力）, 牽引（-性）, 刺絡, 磁石, 処女, 醸熟, 触動, 親和, 垂線, 測量, 打膿, 大気, 腸間, 停食, 天体, 投着, 特効, 熱性, 膿様, 半径, 半視, 氷点, 病学, 物理, 噴火, 閉塞, 抱合, 飽和, 剖解, 本原, 膜状, など
(724)	548	（1語基あたりの平均造語数は約1.32語になる）

つまり、今回の調査で、「神経」は15語の三字漢語が構成されており、造語力の最も強い二字語基としてあげられる。ただし、これはむしろ資料の性格がもたらしたもので、その他の二字語基を見ると、造語数6語の場合は1語基だけ、造語数5語の場合は3語基、というように、造語数の多いものが少数に限られているのに対して、造語数1語だけの二字語基は全体の6割（441語）にも及んでいる。すると、724語の2+1型三字漢語が計548種の二字語基で構成されているので、1語基あたりの平均造語数が約1.3語という計算になる。この結果は、後述する後部一字語基との間で著しい格差が見られ、注目すべきところである。

5. 漢籍語の借用と蘭学者の造語

蘭学資料に見える三字漢語は、蘭学者による造語なのか、それとも、先行する漢籍でその出典が見出せるのか。これは、三字漢語の形成を考えるにあたって、非常に重要な問題である。2+1型の三字漢語を対象に、《四庫全書》(電子版)で検索してみたところ、表5のような結果が出た。《四庫全書》は、中国歴代の典籍が3460余種も収録され、清の乾隆帝の時(1781)に完成された大規模の百科叢書である。同書で用例が見付かれれば、蘭学者による造語ではなく、漢籍語の借用という判断を下すための根拠になる。逆に、同書の検索で用例が得られない場合は、蘭学者による造語の可能性がかなり高いと思われる。

表5 前部二字語基の出典状況

資料名	3字出典あり	2字出典あり	2字新義あり	2字出典なし	資料別合計
1798 『曆象新書』	11(11.6)	9(1.9)	1	6(4.0)	27(3.7)
1805 『医範提綱』	1(1.1)	11(2.4)	1	6(4.0)	19(2.6)
1815 『眼科新書』	4(4.2)	102(21.8)	0	38(25.4)	144(19.9)
1836 『窮理通』	10(10.5)	66(14.1)	0	8(5.3)	84(11.6)
1851 『気海観瀾広義』	29(30.5)	92(19.7)	4	39(26.0)	164(22.7)
1852 『理学提要』	19(20.0)	40(8.5)	3	8(5.3)	70(9.7)
1857 『扶氏経験遺訓』	21(22.1)	148(31.6)	2	45(30.0)	216(29.8)
出典有無の合計	95(13.1)	468(64.7)	11(1.5)	150(20.7)	724

()内は%

出典の状況を資料別にあげたのは、各資料の間で、漢籍語の借用または蘭学者の造語における偏りが見られるかどうかを明らかにしたいからである。「資料別合計」の欄で、各資料にある三字漢語の語数とともに、全語数に占める比率も示しているが、「出典あり」の語の比率がこれより高く、「出典なし」の語の比率がこれより低いなら、当該資料における漢籍語の借用が7資料の平均値より多いということになる。比率の高低が逆となった場合は、蘭学者の造語が平均値より多いと考えられる。表5の結果を見ると、『窮理通』(1836)と『理学提要』(1852)の2資料では、漢籍語の借用が平均値より多いのに対し、残りの5資料では、逆に、蘭学者の造語が平均値を上回っている。しかし、どちらも僅少の差なので、資料別による出自の偏りがあまりないと見たほうが適切であろう。以下では、各欄の状況を実例に基づいてまとめておきたい。

5.1 「3字出典あり」の語

「3字出典あり」の語とは、漢籍において、蘭学資料の三字漢語と同形の用例が見られるものである。たとえば、『窮理通』(1836)には、「雑ふるに初成山質石灰様軟石を以てす。

皆階級法に由りて累生す。」(卷之二)のように、「階級法」という語が見られるが、《四庫全書》で検索すると、たとえば、《大事記統編》(明・王禕撰、14世紀末)には「宋太祖作階級法、專治禁軍」(宋の太祖皇帝は階級法を作って、専ら禁衛軍を治めるようにした)と、同形の語が使われている⁶。また、『扶氏經驗遺訓』(1857)では、「一部感応力ノ過盛、稟賦焮衝性ノ體質、…」のように、「感応力」という語が用いられている。これに対して、中国の《鷄肋集》(北宋・晁補之撰、10世紀後半)には「獲是感應力、於今十方普供養」(この感応力を獲得すれば、今に於いて八方から供養されるようになる)という一節があり、同形の語が確認できる。この種の語は、漢籍からの借用と考えてよいが、具体的に見ていくと、

夏至線 巨蟹宮 顕微鏡 三角形 三角柱 人馬宮 正方形 赤道線 尖瓣体
測量家 対角線 地平線 長圓柱 長方形 天秤宮 南極圈 白羊宮 平行線
平行度 平行面 望遠鏡 北極圈 立方尺 立方体

のような天文・歴算関係の語なら、その出典は、《表度説》(熊三拔、1611)、《乾坤体義》(利瑪竇、1614)、《天問略》(陽瑪諾、1615)、《職方外紀》(艾儒略、1623)、《新法算書》(徐光啓・龍華民ら、1645)、《坤輿図説》(南懷仁、1674)など明末清初ごろの在華宣教師の漢訳洋学書、あるいは、《歴算全書》(梅文鼎、18世紀初)、《御製数理精蘊》(1723)、《皇朝通典》(1767)といった中国人が著した歴算・数学書の類に、とくに集中している。また、

灌腸法 虚脱証 外科家 合併病 産科家 消毒薬 腸胃熱 内服薬 発汗剂
発汗法 皮膚病 婦人病 膀胱部

のような医学用語なら、《金匱要略》(東漢・張仲景、3世紀前半)、《備急千金方》(唐・孫思邈、652)、《玉機微義》(明・徐彦純、1396)、《証治準繩》(明・王肯堂、1602)といった漢方の医書で出典が見付かるものが相当数にのぼる⁷。このように、三字漢語の出典を求めていくと、幕末の蘭学者達がどのような書物を読み、どのような教養を持っていたかをかいま見ることができそうである。

5.2 「2字出典あり」の語

「2字出典あり」の語とは、漢籍において、三字漢語の用例がないが、前部二字語基と同形の用例が見られるものである。2+1型三字漢語の中で、この種に属するものが最も多く、全体の6割以上を占めている。漢籍と蘭学資料両方の用例をあげると、たとえば：

⁶ 原文の引用にあたって、蘭学資料と漢籍を問わず、文字は、現行の日本漢字の字体に改め、句読点は、筆者が適宜に付け加えた。

⁷ 《四庫全書》には、紀元前8世紀から西暦18世紀前半までの中国歴代の医書が計96種類収められている。

- ◇ (中) 夜遊 → (日) 夜遊病
(中) 不然，則如無目夜遊，無足登涉，動致顛殞。(さもないと，すなわち目の見えない夜遊び，足の歩けない山登りの如く，とかく害をもたらすものだ。) (明・繆希雍撰《神農本草經疏》卷一)
(日) 又夜遊病ト称スル者アリ，睡中立テ歩行シ言笑シ…。(『氣海觀瀾廣義』卷十三)
- ◇ (中) 觸動 → (日) 觸動機
(中) 觸動機結，則撐索竹去地三尺，賊馬無不被絆。(仕掛けに触れると，竹の棒が高く弾んで，敵の馬が皆つまずいて倒れる。) (明・唐順之撰《武編》前集卷六)
(日) 亦タ，皆ナ人身於テハ炭素之作用ニ係ル。觸覚機ヲ減損シ，觸動機ヲ増進ス。(『理學提要』卷一)
- ◇ (中) 伝染 → (日) 伝染性
(中) 天行赤眼者能傳染於人。(天行赤眼という病気は人に傳染することができる) (《銀海精微》卷上)
(日) 本来，皮疹熱ニ非ルノ熱病モ，終ニ傳染性ノ皮疹ヲ發スルコトアリ。(『扶氏經驗遺訓』卷之十八)
- ◇ (中) 感染 → (日) 感染期
(中) 常人感染則成時疫，小兒調理未遑，況敢言種痘乎。(普通の人が感染されると流行病になるが，子供は未だ發育中なので，種痘を受けるどころではない。) (《御纂醫宗金鑑》卷六十)
(日) 感染期，始メテ感染スルノ期ニシテ所謂ル布種^{クネマキ}ノ時トス。(『扶氏經驗遺訓』卷之二)
- ◇ (中) 可燃 → (日) 可燃物
(中) 井油得水愈熾，高奴之水肥可燃乎。(井戸の油が水を得ていよいよ燃え上がり，高奴という地方の水が肥えていて燃えるのだ) (《物理小識》卷一)
(日) 山物ヲ分カチテ，石，土，塩，可燃物，金属，火山ノ燃素等トナス。(『氣海觀瀾廣義』卷三)
- ◇ (中) 凝固 → (日) 凝固質
(中) 終始者凝固不洩，而發育之氣全焉。(終始一貫する者は凝固にして洩れないため，發育の気がいっぱいなはずだ) (《御纂周易述義》卷十)
(日) 凝固質，流動を成し，流動質，發氣をなすは，当に定度の暖質を得べし。(『窮理通』卷之八)

このように，前部二字語基に関しては，漢籍にほぼ同じ意味の用例が見られるので，漢籍語の借用ということになるが，前述の「3字出典あり」の場合に比べ，漢籍での用例が各ジャンルに分散していて，出典資料の特定が難しい。

しかし，重要なのは，「感染」と「期」，「可燃」と「物」は，語基のレベルでいえば，いずれも漢籍にあったものであるが，これらを「感染+期」「可燃+物」のように一語に結合させることによって，ある概念が語の形で表現されるようになったという点である。この意味で，「感染期，可燃物」のような多くの三字漢語の出現は，まさに，蘭学資料に

おける新語の創出=造語というべきである。一方、近代以前の中国語には、たとえ「感染期、可燃物」がないにしても、「感染+□、可燃+□」の形でできた三字漢語はほかにあったのか。ここまでくると、もはや個別の語の有り無しを超えて、近代以前の中国語における三字漢語の造語法がどのように存在していたか、という問題へ発展していくことになるが、管見では、これまでに、この問題を正面からとりあげた論考はほとんどないようである。

5.3 「2字新義あり」の語

「2字新義あり」の語とは、漢籍に同形の用例が見られる前部二字語基が、新しい意味に転用されたものである。たとえば、「揮発」という語は、書道の随筆を取めた《書苑菁華》(南宋・陳思撰)では、“以管毛硯汁，恣情揮發，書吳縑魯縞不知其数”(毛筆と硯と墨を以つて、思う存分筆に任せ、上質な絹や布に数知れないほどの字を書いた)のように、逆順語の「發揮」とほぼ同じ意味に使われていた。しかし、蘭学資料の『理学提要』(1852)には「硫黄，窒素(ガ)水素ト抱合スレバ，則(チ)揮發瓦斯，揮發精ト為リ…」という用例が見られ、現代語と共通する「液体が気化する」の意に転用されている。

また、「分子」という語は、《新法算書》(明・徐光啓等撰，1645)では“取各率之分子，用通分法乘之”(各比率の分子を取つて、通分法で相乗する)のように、数学用語として使われていたが、蘭学資料の『曆象新書』(1798)になると、「金に比すれば粘力弱して、火の動力に堪へず，又且，其分子精なり」(中編下巻)のように、物質の最小単位を表す意味に用いられている⁸。

以上のほか、「金属(製)、真空(中)、普通(力)」なども、新しい意味に転用された二字語基としてあげられる。

5.4 「2字出典なし」の語

「2字出典なし」の語とは、漢籍において、三字漢語の語形も前部二字語基と同形の用例も見当たらないものである。この種の二字語基に関しては、蘭学者による造語の可能性がかなり高いが、その語構成を検討してみると、ごく少数の例外を除いて、漢籍に出典のあるものと混同していて、彼我の見分けが付かないようになっている。

少数の例外とは、たとえば、『眼科新書』(1815)では、「強過眼，此症ハ則(チ)視力尤モ強(ク)，白昼(ニ)星ヲ視ル之類也」(巻五)のように、「強過眼」という語が使われているが、これは、おそらく「強過ぎる」という日本語の表現に影響されてできた語だろうと推測される。漢籍語なら、逆順の「過強」となるはずである。この意味で、『扶氏經驗遺訓』(1857)に見える「過敏」は、まさに漢籍語の語構成に合致した和製語といえる。

⁸ このほか、1+2型の三字漢語には「気分子，質分子，小分子」(曆象新書)、「水分子」(窮理通)や「一分子」(理学提要)などの語もある。

また、『扶氏経験遺訓』には「脚浴法」という語があるが、これは日本語のN+V客述関係をふまえた和製語で、漢籍語なら、語順がV+N述客関係の「浴脚」になるであろう。しかし、構造上の特徴で指摘できる和製語に限られており、出典の有無によって判別せざるを得ないのが実情である。以下、蘭学者によって造られ、現代語まで受け継がれた二字語基の用例をあげておく。

遠心（力） 過敏（証） 海棉（状） 角膜（病） 拡張（力） 眼球（瘤） 気管（中）
求心（力） 痙攣（症） 結晶（水） 元素（酸） 甲状（腺） 酸素（計） 射精（管）
触覚（機） 神経（系） 水素（気） 繊維（質） 単純（熱） 地核（質） 粘液（膜）
排泄（物） 氷点（下） 飽和（点） 防腐（法） 麻醉（薬） 慢性（病） 無機（体）
輸精（管） 輸胆（管） 輸尿（管） 有機（体）

6. 一字語基の品詞性と造語力

後部一字語基は、前部二字語基のような多種の品詞性がなく、基本的には名詞性のもとなる⁹。ただし、実際にその中身を見れば、実質的な意味を表し、単独でも使えるような語基性の強いものから、意味が形式化され、単独では使えないような接辞性の強いものまで、性質の微妙に違うものが並存していて、語基と接辞の境界線が必ずしも明らかではない¹⁰。ここでは、前部二字語基との比較をするため、表4の形に倣い、後部一字語基の造語力についてまとめたい（表6）。

表6でわかるように、1語基での最も多い造語数は56語に達しているほか、造語数10語以上の一字語基が27種もあり、これによって構成された三字漢語は計546語にのぼり、2+1型三字漢語の75.4%を占めている。一方、造語数1語だけの語基は数が比較的少なく、32種にとどまっている。このような語基分布の特徴を、前部二字語基の場合（表4）と比較すると、両者の違いがよくわかる。総じていえば、724語の2+1型三字漢語を構成するのに、前部二字語基では、548種の語基が用いられ、1語基あたりの平均造語数が約1.3語である。一方、後部一字語基では、103種の語基が用いられ、1語基あたりの平均造語数が約7語となっている。つまり、種類が豊富で、平均造語数が少ない前部二字語基に対して、後部一字語基は、種類が少なく、平均造語数が多いという特徴を持っている。そのため、三字漢語の造語に関しては、入れ替わりが多く、臨時性が強い前部二字語基よりも、安定的で、語構成上の法則性をとらえやすい後部一字語基が、中心的な役割を果たしているといえる。

⁹ 野村雅昭（1974）では同様な指摘が見られる。ただし、「神経+熱、海水+浴、固結+腫、金属+製」のような少数の用例に関しては、後部一字語基の品詞性がやや微妙で、和製語的な特徴といえるかもしれない。

¹⁰ このことについては、野村雅昭（1978）で詳しく論じられているので、参照されたい。

表6 後部一字語基の造語力

造語数	語基数	語基と語例
56-37	4	症(癌毒-, 恐怖-, 痙攣-, 持久-, 聚膿-, 創傷-, 多血-, 旅行-) 法(灌腸-, 減食-, 根治-, 集合-, 衝動-, 截断-, 打膿-, 分析-) 力(拡張-, 感染-, 抗抵-, 磁石-, 成形-, 補給-, 抱合-, 磨軋-) 性(感温-, 感受-, 固有-, 刺衝-, 第一-, 伝染-, 粉末-, 分析-)
29-20	8	病(急性-, 恐水-, 精神-, 婦人-), 線(回帰-, 視角-, 地平-, 反射-) 状(凝固-, 繊維-, 流滴-, 漏斗-), 機(吸収-, 消食-, 消耗-, 新生-) 剂(健神-, 清涼-, 内服-, 利尿-), 体(機性-, 固形-, 透明-, 流動-) 質(可燃-, 樹脂-, 神経-, 石灰-), 証(過敏-, 交感-, 先天-, 腐敗-)
17-10	15	眼(遠視-, 斜視-), 家(測量-, 分析-), 薬(内服-, 麻酔-), 学(解剖-, 機械-), 期(発生-, 未熟-), 器(金属-, 分泌-), 物(酸化-, 排泄-), 管(乳糜-, 排水-), 熱(遷延-, 停食-), 翳(先天-, 白色-), 宮(獅子-, 雙女-), 品(奇重-, 人工-), 上(星球-, 直線-), 中(施術-, 世界-), 鏡(顕微-, 写真-)
8-5	8	液(水晶-, 分析-), 気(新鮮-, 水素-), 術(分合-, 防火-), 浴(海塩-, 微温-), 筋(上斜-, 旋回-), 膜(処女-, 粘液-), 点(反射-, 飽和-), 系(血管-, 太陽-)
4-2	36	膏(神水-), 骨(口蓋-), 形(三角-), 部(創傷-), 面(直線-), 様(癌瘡-), 癌(眼瞼-), 度(平行-), 計(酸素-), 角(反射-), 精(分子-), 説(天体-), 素(南極-), 油(揮発-), 腫(固結-), など
1	32	的(排邪-), 級(石炭-), 界(大気-), 派(振動-), 態(滴流-), 下(氷点-), 腺(甲状腺-), 製(金属-), など
(724)	103	(1語基あたりの平均造語数は約7語になる)

7. 一字語基と漢籍語からの影響

後部一字語基は、品詞性の面だけでなく、前部二字語基との結合関係も比較的単純である。しかし、問題なのは漢籍語との影響関係である。前部二字語基については、前述のように、漢籍で二字漢語としての出典が得られるかどうかで、その出自が明らかになることが多いが、後部一字語基となると、また事情が違う。中国語は、古代に遡るほど一漢字一語の言語だとされている。そのため、もし、後部一字語基を一字漢語として漢籍での出典を求めようとすれば、おそらく例外なしに、大量の用例が見付かるに違いない。ただし、このような用例では、たとえ、前部二字語基と後部一字語基がそれぞれ漢籍で使われたとしても、三字漢語を構成できるという、後部一字語基の造語機能を説明することにはならない。言い換えれば、後部一字語基として三字漢語の構成に使われた確かな用例が得られない限り、漢籍語からの影響については慎重にあつかう必要がある。

このような考えにしたがえば、5.1で述べた「3字出典あり」の三字漢語に含まれた後部一字語基は、中日両方の造語例が見られるものとして、また、漢籍で三字漢語の造語例が得られない後部一字語基は、蘭学資料のみの用法として、大きく二分することができる。

表7 後部一字語基のジャンル別および漢籍語との関係

	造語数	医学書のみ	医学書と物理学書	物理学書のみ
中日 両方 あり (31)	56-10	-症, -剂, -証, -眼, -薬, -期	-法, -力, -病, -状, -家, -器, -管, -熱, -上, -中, -鏡	-線, -体, -学, -宮
	4-2	-部		-内, -形, -径, -面, -種, -度, -圈, -鐘, -柱
蘭学 資料 のみ (40)	37-10	-翳	-性, -機, -質, -物, -品	
	8-2	-浴, -筋, -膏, -骨, -毒, -勞, -痛, -癩, -創, -痘, -癭, -油, -腫	-液, -気, -術, -膜, -系, -塩, -様	-点, -極, -動, -霧, -水, -酸, -計, -角, -精, -孔, -球, -説, -素, -鉄

表7では、後部一字語基の造語の状況に基づいて、「中日両方あり」と「蘭学資料のみ」の両方に、造語数2語以上の後部一字語基を振り分けて記入した。この表からは、漢籍語からの影響とともに、造語力の強弱や分野別による偏りなどの状況もうかがえる。全体的には、「中日両方あり」のほうには造語数の多い語基が集中し、「蘭学資料のみ」のほうには造語数の少ない語基が多く見られる結果となっている。しかし、漢籍語との影響関係については、語基ごとに状況が異なるため、それぞれの具体例に沿って検討しなければならない。

7.1 「中日両方あり」の一字語基

三字漢語が漢籍でそのまま見付かった場合、それに含まれた後部一字語基の用法は、「中日両方あり」の一字語基として分類したが、実例を見ていくと、漢籍語との関わり方や影響の度合などの面で、種々の相違が見られる。たとえば、蘭学資料に現れた、「-宮」で構成された「白羊宮、宝瓶宮、巨蟹宮、人馬宮、獅子宮」などの10語は、いずれも、《星学大成》(16世紀後半)や《歴算全書》(18世紀初期)をはじめとする漢籍で出典が見付かり、しかも、『気海観瀾広義』(1851)という一文献だけに使われたものである。つまり、後部一字語基「-宮」に関しては、すべての三字漢語が漢籍からの借用であり、蘭学者による造語がなかったということになる。

また、「-径」の場合は、「赤道径、土星径」の2語が漢籍に見られるが、「両極径」が漢籍で見当たらず、蘭学者による造語の可能性が高い。だが、全体的には、漢籍からの借用が主で、蘭学者による造語が付随的なものと見るべきであろう。この種の後部一字語基は少なく、造語数も限られている。これに対して、造語数10語以上のものがかなり集中しているのは、蘭学者による造語が多く、漢籍語からの借用が少ない場合である。紙幅の関係で、例をあげるだけにとどまる。

(1) 一法

「一法」で構成される三字漢語のうち、「階級法、灌腸法、直達法、発汗法」の4語は、漢籍で出典が得られるものである。たとえば、最古の農書とされる《齊民要術》(北魏・賈思勰撰, 640頃)では、「灌腸法」のほかに、蘭学資料にはない「擣灸法、銜灸法、膈灸法」といった三字語が見られる。また、漢方の処方を集めた《世医得効方》(元・危亦林撰, 1345)には、「発汗法」とともに、「転下法、水漬法、葱熨法」などの三字語が使われていた。こうした用例からは、漢籍では「一法」を後部一字語基とする三字漢語の造語法がすでに存在していたことがうかがえる。一方、蘭学資料では、漢籍に見える二字漢語を取り入れながら、「一法」の造語機能をいかした形で、

圓周法 下墜法 器械法 強壯法 姑息法 根治法 滋養法 刺絡法 集合法
衝動法 截断法 摂養法 断食法 直治法 投薬法 膿潰法 発焰法 分析法
腐蝕法 摩擦法 誘導法 預防法 冷浴法

のように、数多くの「2字出典あり」の三字漢語が創出されている。このほか、「脚浴法、水稱法、串線法、打膿法、鎮瘻法、防腐法、減食法」といった「2字出典なし」の三字漢語も10語ほど見られる。

(2) 一力

漢籍では、「人力、精力、勢力、足力、目力」のように、二字語が多く使われるが、三字語の用例はほとんど見当たらない。蘭学資料の「一力」に関する三字漢語41語のうち、漢籍で出典が見付かったのは、次の「磁石力、感応力、造化力」の3語だけである。

- ・如磁石力令鉄轉移，雖無有心，似有心者。(磁石力が鉄を動かすように、心が有らずと雖も心が有るようだ)《喻林》卷二(明・徐元太撰, 1615)
- ・但衣食為善縁而已，獲是感應力，於今十方普供養。(ただし、衣食は善の因縁に過ぎず、この感応力を獲得すれば、今に於いて八方から供養されるようになる)《鷄肋集》卷六十九(北宋・晁補之撰, 10世紀後半)
- ・攬彼造化力，持為我神通。(彼の造化力をものにして、我の神力とする)《李太白文集》卷八(宋・宋敏求編, 1064)

また、蘭学資料では、「2字出典あり」の三字漢語が30語ほど数えられ、漢籍にある少数の用例とは対照的である。たとえば：

圧搾力 下行力 感染力 起動力 吸取力 凝聚力 抗拒力 自然力 資生力
障礙力 親和力 生殖力 相感力 想像力 中心力 粘着力 反対力 普通力
補給力 抱合力 膨脹力 磨軋力 無形力 輸送力

ちなみに、「2字出典あり」の諸語を対象に、「-之力」が付く形で漢籍の出典を検索してみると、蘭学資料の「下行力、抗拒力、自然力、資生力」に対し、漢籍では、それぞれ「下行之力、抗拒之力、自然之力、資生之力」の用例が見出された。つまり、蘭学資料では三字漢語が多用されるのに対して、漢籍では、三字漢語以外の、たとえば、「之」の付いた句の形で表現される傾向があるように思われる。このほか、「2字出典なし」の語として「遠心力、拡張力、求心力、近心力、神経力」などがある。

(3) 一症

漢籍では、昔から一字語の用例が大量に存在する。たとえば：

- ・攻疾不对其症，則病愈劇。（病気を退治するには、其の症に対応しないと、其の病気がますますひどくなる。）《呻吟語摘》卷上（明・呂坤著，17世紀初期）

また、漢方の医書では、「症状／病症、陽症、陰症、湿症、熱症、内症」といった二字術語もよく見られる。三字語は、蘭学資料に見える「多血症」のほか、「消渴症、満実症、瘀血症」などが見付かった程度で、数が少ない。四字語以上になると、「伝染之症、不治之症、舌上出血之症、小兒急慢驚風之症」のように、多字語の後部に「+之症」が付いて句の形になるのが普通である。

一方、蘭学資料では、「3字出典あり」の語が「多血症」の1語にとどまるが、「2字出典あり」の三字漢語が40語ほど数えられる。たとえば、

癌瘡症 暴卒症 持久症 床上症 創傷症 打撲症 回虫症 旅行症 麻痺症
兼発症 刺破症 痘毒症 流行症 恐怖症 攀急症 牛眼症 熱病症 破裂症
聚膿症 内部症 衰弱症 虚脱症 脱液症 重睫症 自然症

のように、いずれも病名を表すためのものであるが、漢方の医書では、同形の三字漢語はむろん、同形の二字漢語に「-之症」が付く形の表現も見当たらない。このほかに、「癌毒症、癌様症、瘰癧症、剛膜症、黒障症、神経症、囊様症」など「2字出典なし」の三字漢語が15語ほどある。

このように、「2字出典あり」の語と「-症」は、漢籍では別々に存在したものであるが、これを造語成分として三字漢語の形に組み合わせたのは、蘭学者独自の発想によるもので、二次的造語ともいうべきであろう。ちなみに、蘭学資料の「-症」に関する三字漢語は、すべて『眼科新書』（1815）という一資料に出ていることから、著者の杉田立脚による造語かと推察される。

(4) 一証（證）

漢方の医書では、一字語の用例が最も多いが、N+N修飾関係の名詞となる「内証、外証、陽証、陰証、表証、形証」や、V+N述客関係の動詞となる「弁証、論証、見証」などの

ように、二字語もよく使われる。三字語の用例として、「陽明証、太陽証、中風証、狐惑証、虚勞証」などがあげられるが、蘭学資料と重なったものは「虚脱証」の1語だけである。

- ・肉冷、汗出、神昏、此皆虚脱証、何以謂之生風？（肌が寒くなったり、汗が出たり、気が遠くなったり、これらはみな虚脱証で、なぜ風邪というのか）《産育宝慶集》卷上（宋・李師聖撰、1131）

蘭学資料では、「合併証、交感証、自然証、先天証、腐敗証、本原証、麻痺証、預防証」のように、「2字出典あり」の三字漢語が13語見られるほか、「過敏証、痲衝証、瘧攣証、神經証、単純証、慢性証」など「2字出典なし」のものが6語ある。

《漢語大詞典》の解釈によると、「証（證）」は、「病状、症状」の意味で、「後世には〈症〉がよく使われる」とあるが、「証（證）」と「症」の使い分けや、「後世」とはいつの時代をさすかが示されていない。蘭学資料での使い分けも不明であるが、受容した漢方の系統と関係するののか、「症」は『眼科新書』（1815）に、「証（證）」は『扶氏經驗遺訓』（1857）にそれぞれ使われていたのが興味深い。ちなみに、現代日本語では、「証（證）」が消えて、「-症」に一本化されたが、現代中国語でも同じ現象が起きている。「-症」に関する三字漢語の変遷を含め、日本語からの影響という視点で調べてみる必要がある。

このほか、医学関係の意味を表す後部一字語基として、「-病、-眼、-熱、-劑、-薬」などもあるが、造語の状況に関しては、「-症」と「-証」に類似するところが多く、詳細は割愛する。

(5) -家

「-家」に関する三字漢語は、漢籍では、17世紀初めからの、在華宣教師と中国人協力者による漢訳洋学書に早期の用例が見え始める。たとえば：

- ・西庠之学、其大者有五科：一道科、二治科、三理科、四医科、五文科。而理科中旁出一支為度数之学、此一支又分為七家：曰数学家、曰幾何家、曰視学家、曰音律家、曰輕重家、曰歴学家、曰地理家。七家俱統于度数。（西洋の学問には、大きく五つの科があり、一には道科、二には治科、三には理科、四には医科、五には文科である。理科の中からは、度数の学という一系統が別に生まれて、また七つの家に分かれている。すなわち、数学家、幾何家、視学家、音律家、輕重家、歴学家、地理家のことであるが、いずれも度数の学に属する。）《新法算書》卷九十八（明・徐光啓等撰、1645）

ここに、「-家」の三字語がいくつも出ているが、「ある専門に携わる人（=個人）」という今日の使い方ではなく、「系統・流派（=一族）」の意味なので要注意である。一方、蘭学資料の用例を見ると、「外科家、産科家、視学家、星学家、測量家、天学家」など、漢籍と同形の三字語が見られるとともに、「解剖家、窮理家、虚脱家、經驗家、多血家、治療家、發明家、分析家」のように、「2字出典あり」のものも使われている。このうち、

文脈の関係で、個人の意か一族の意か分別のつかないものが多いが、たとえば、

- ・諸窮理家の言に拠れば、一種の解釈、質化して地脂となる。（『窮理通』卷之二）
- ・此發明家「ハリッペレイ」氏、「プリンス（名爵）マウリッツ」ノ為ニ、二管ヲ連ネ各眼ニ掛クルコト尋常眼鏡ノ如クスル者一具ヲ造レリ。（『氣海觀瀾広義』卷十五）
- ・虚脱家ハ其體ヲ平臥セシメテ、血ヲ心臟ニ還流シ易カラシテ…。多血家ハ足脚ヲ垂レテ、頭胸ヲ高フシ、脚浴及ビ臂浴ヲ施シ…。（『扶氏經驗遺訓』卷之十一）

のように、確実に個人を指している用例が見られるので、蘭学資料における「-家」の意味的変容と明治初期にいたるまでの行方が注目される。

(6) -学

漢籍では、古くから「星学、天学、道学、理学」のように、二字語が中心で、三字語の用例はごく少数にとどまる。蘭学資料と重なった三字語として、「物理学」と「力芸学」の2語があげられる。たとえば：

- ・科举之外有義理学，義理之外有物理学，物理之外有性命学。康節曰，願受教。遂伝易学。（科举のほか義理学があり、義理のほか物理学があり、物理のほか性命学がある。康節が曰く、教えを受けたい。すると、易学を伝えてもらうことになった。）《齐乘》（元・于欽撰，1351）
- ・遇物之重者，举人力所不能運，所不能動者，以此力芸学之法之器而運動之，無難也。（重い物に遇い、人力で運べない、動かせないとき、この力芸学の方法と器具を以って移動させれば、難しいことはない）《奇器図説》卷一（鄧玉函・王徵訳，1626）

上掲の用例はいずれも近代科学が成立する以前の概念を表したものとはいえ、「-学」に関する三字語の造語法は、漢籍において早くから存在していたことが確認できる。ただし、多くの場合では、三字語ではなく、「楽律之学、水利之学、西洋之学、専門之学、内経之学、本草之学」のように、「-之学」が付いた句の形で表現されていたと見られる。

一方、蘭学資料では、「機械学、解剖学、形器学、経験学、考証学、植物学、薬剂学」のように、漢籍よりも多くの「2字出典あり」の三字漢語が造り出されている。この中で、『理学提要』（1852）にみえる「植物学」の用例は、同語の初出とされる漢訳洋学書《植物学》（韋廉臣・李善蘭，1858）よりも数年早くっており、重要視されるべきである。

- ・若キハ花葉，根莖ヲ剖別（シ），各異ノ官能ヲ辨折スルガ，則チ別ニ植物学有り，此ノ学（ノ）講ズル之所ニ非ズ也。（『理学提要』卷三）

このように、蘭学資料の漢文体で育まれた三字漢語の造語法がそのまま受け継がれて、明治初期に急激に現れた「政治学、経済学、社会学」といった新語の誕生へつながっていつ

たものと思われる。

(7) 一体

漢籍では、17世紀以後の漢訳洋学書をはじめ、「天体、地体、物体、定体、動体、凝体、流体」などの二字語や、蘭学資料に見える「正方体、尖円体、尖瓣体」のほかにも、「太陽体、半円体、連環体」などの三字語が見られる。したがって、「一体」に関する三字語の造語機能が中国語側で早くから用意されていたといえる。ただし、蘭学者達は、漢籍にある三字語の受容にとどまっておらず、「可燃体、気状体、凝固体、固形体、滴流体、透明体、動物体、発光体、流動体」などの「2字出典あり」の三字漢語や、「機性体、無機体、有機体」などの「2字出典なし」の三字漢語を数多く造り出している。たとえば、

- ・自(ラ)光ヲ発スル者ヲ発光体ト名ヅケ、コレガ為ニ照ラサルル者ヲ暗体ト名ヅク。…直ニ光ヲ通スル者ヲ透明体ト名ヅケ、光線ヲ諸方ニ広ゲ、或ハ分子ヨク舍密法ニテ、コレト抱合スル者ヲ不透明体ト名ヅク。(『気海観瀾広義』卷十四)

のような文脈からは、蘭学者達が「一体」の造語機能をいかして、積極的に新語を造り出そうとする姿勢をかいま見ることができよう。

7.2 「蘭学資料のみ」の一字語基

ここに分類したのは、漢籍で三字漢語の造語例が見出せず、蘭学者達が自ら造語機能を付与したと思われる一字語基である。この種の一字語基で構成された三字漢語は、どのような和製語的な特徴を持っているか、また、明治期以後の三字漢語とどうつながっているか。漢籍語との影響関係を考慮しながら、語基ごとにその状況をまとめてみる必要がある。

(1) 一性

漢籍では、昔から「気性、人性、天性、物性、薬性」といったN+N修飾関係の二字名詞や、「感性、記性、悟性、知性、理性」といったV+N述客関係の二字動詞が使われていた。三字語については、歴代の詩文から類語を集めた《佩文韻府》(清・張玉書ら撰、1711)には、「君子性、清潔性、幽閉性、楽和性、守衛性」など「一性」で終わる三字語が40語ほど見出し語として取められている。しかし、実際に《四庫全書》の本文にあたってみると、「君子性→君子之性、守衛性→守衛之性」のように、「一之性」の付いた形でない、用例が見付からないことが多い。結局、同形の三字語が得られたのは、「金石性、歳寒性、成人性、坦率性、物外性」など少数の用例であった。たとえば：

- ・須從事上学，寧有物外性。(實際のことから学ぶべきで、むしろ俗世間を度外視する性格があってほしい)《止堂集》卷十六(南宋，12世紀)
- ・諒非金石性，安能宛如昨。(金石のような性質でない限り、昔のように綺麗で居続ける

ことができないだろう)《笠沢藁書》(唐・陸龜蒙撰, 9世後半)

- ・七歳居母喪, 便有成人性。(七歳で母の喪に居るときから, 成人の性質が現れていた。)《北史》卷二十九(唐・李延寿著, 7世紀)

以上の用例では, 「-性」は, 専ら字数制限の厳しい詩文に限って使われており, 「-之性」の圧縮形とも考えられる。また, 前部二字語基との関係でいえば, 前部分が修飾する役目を担い, 意味の重点が後部分の「-性」に置かれている傾向が強いため, 「性格・性質」といった意を表す語基となっていて, 現代語の接尾辞的用法を持つ「-性」とは隔たりが大きいと思われる。

一方, 蘭学資料では, 「可展性, 可剝性, 感受性, 感应性, 凝固性, 牽引性, 再醸性, 腐敗性, 分析性, 流行性」(以上V+N連体修飾関係), 「形器性, 第一性, 膽液性, 腸胃性, 粉末性」(以上N+N修飾関係)のように, 「2字出典あり」の三字漢語が数多く用いられている。また, 「2字出典なし」の三字漢語として, 「解凝性, 感温性, 焮衝性, 瘧攣性, 舍密性, 神経性, 麻醉性」などがあげられる。造語数だけでなく, 「-性」の意味用法にも微妙な変化が現れている。たとえば,

- ・其一ハ玻瓈ヲ擦シテ発スル者ニシテ, 玻瓈性越歴ト名ヅク。其二ハ華爾斯若ハ洛屈ヲ擦シテ発スル者ニシテ, 華爾斯性越歴ト名ヅク。(『気海観瀾広義』卷十一)
- ・其発作(ハ) 間歇性ヲ得テ, 衰弱益(々)加ハルノ時ニシテ, 三四週持続ス。(『扶氏経験遺訓』卷之九)
- ・其初期ハ腸胃性ノ感冒ニシテ, 多クハ焮衝性ヲ帯ブ故ニ吐剂ヲ用ヒ…。(『扶氏経験遺訓』卷之九)

のような用例では, 「性=性質」という解釈が成立しにくく, 意味の重点が前部二字語基に置かれている感じが強いので, 「-性」の接尾辞化の現れとして見受けられる。また, 用例の分布から見ると, 前期の資料にはなく, 中期以降の資料に見え始め, 『窮理通』(2語), 『気海観瀾広義』(10語), 『理学提要』(4語), 『扶氏経験遺訓』(21語)のように, 幕末ごろには「-性」による造語はすでに蘭学資料の全範囲へ広まっていたと思われる。

(2) -機

漢籍では, 「機関, 機械, 機会, 機器, 機密, 機動」や「時機, 契機, 動機, 投機, 待機, 転機」のように, 二字語の使用がよく見られる。語基としての「機」は, 「からくり」(機関, 機械)または「きっかけ」(時機, 機会)といった意を表すのが普通であった。しかし, 「-機」を後部一字語基とする三字語に関しては, 未だにその用例が見付かっていない。

一方, 蘭学資料では, 「-機」に関する三字漢語が複数の資料に用いられており, 「-機」の意味合いもほぼ共通していると見られる。たとえば:

- ・脳髓ノ機ヲ下体ノ神経系ニ導キ、コレヲ発揚シテ脳髓ヲ刺戟スルトイウ。此**神経機**、発揚極メテ盛ナルニ至レバ、コレヲ「ソムナブユリミュス」トイヒ…。(『気海観瀾広義』卷十三)
- ・造化力(ニ)三作用有リ、曰ク默加尼私繆斯(^{メカニスミウス}形器機)、曰ク舍密私繆斯(^{セイミスミウス}分析機)、曰ク^{ダイマミスミウス}納那密私繆斯(無形機)。覆載ノ之間、萬物森羅、皆ナ此ノ三作用ニ由ラ不ルハ無シ。(《理学提要》総論)

以上の2例から「-機」は、一字漢語としての使用例も見られること、そして、オランダ語の語尾「-スミウス(私繆斯)」に対応しており、訳語から生まれた可能性があること、また、「-機」の意味は「機能」の圧縮形として考えられること、などがわかる。「機能」という語自身はそもそも漢籍にはなく、蘭学資料に見えることから、和製漢語の可能性が高いが、「感受機、吸収機、交感機、蒸発機、触覚機、触動機、生殖機、分合機、分泌機、補給機」のような三字漢語にある「-機」は、「機能」の意を担っているだけに、蘭学者独自の使い方といえる。

ただし、「-機」に関する三字漢語で、明治初期まで受け継がれたものは少なかったようである。たとえば、『医語類聚』(1872)には、英語の訳語として、「Exosmose滲出機、Endosmose滲入機、Genetica生殖機」の3語しか登録されていない。しかも、現代語では、三字漢語における「-機」は、もはや「機能」の意ではなく、「掃除機、飛行機」のように、「機械」の意味を表すようになっている。この意味変化において、また、在華宣教師資料との影響関係が見られるようで、今後の精査が必要である。

(3) -質

漢籍では、「形質、性質、体質、品質、本質」や「材質、鉄質、土質、銅質、木質」などの二字語が見られるが、蘭学資料に見える「火山質、粘土質、白土質、有形質、硫鐵質」のような三字漢語は皆無のようである。前述の《佩文韻府》(清・張玉書ら撰、1711)には、「-質」で終わる三字の見出し語が90余項目収められているものの、実際に検索してみると、「金玉質、剛強質、棟梁質、氷玉質、浮雲質」のように、専ら詩句だけに使われているか、または、「自然質→自然之質、文明質→文明之質、冷熱質→冷熱之質」のように、三字語がなく、「-質」が付いた句の形で使われているか、のどちらになっていることがわかる。たとえば：

- ・端溪有潜虬，孕此金玉質。(端溪の清流には竜が潜んでいて、この金玉のような性質を孕ませた)《晦庵集》卷三(宋・朱熹撰、12世紀後半)
- ・薄薄身上衣，輕輕浮雲質。(薄々とした身上の衣、軽々とした浮雲の質感のように)《石倉歴代詩選》卷八十六(明・曹学佺編、17世紀初期)
- ・雖有自然之質，必人工加焉，然後可適用。(自然の素質があると雖も、必ず人工を加えてからはじめて適用するようになる)《周礼訂義》卷二(宋・王與之撰、11世紀)
- ・氷炭不言，而冷熱之質自明者，以其有實也。(氷や石炭は言わなくても、その冷熱の性

質が自明なのは、実体があるからだ)《晋書》卷三十九(唐・房玄齡ら編, 7世紀中期)

一方、蘭学資料の三字漢語を見ると、「堅凝質、弛緩質」のような、形容詞性の前部二字語基を持つものが少数なのに対して、「樹脂質、神経質、石灰質、纖維質、胆液質、地核質、蜂巢質」といった名詞性の前部二字語基や、「可燃質、凝結質、焼過質、輸送質、流動質」といった動詞性の前部二字語基を持つものが主流となっている。また、意味においては、漢籍にある「-質」は、どちらかといえば、物事の見えない内面(性質・品格)に傾いているのに比べ、蘭学資料にある「-質」は、物事の外見(物質・物体)に重点が置かれているように感じられる。たとえば:

- ・初生山の地核質と同じからず。…初生山の形、已に定まれば、諸流動質、罅隙より噴出す。…第二山中尤も石灰質多し。(『窮理通』卷之二)
- ・其人ハ必(ズ) 神經質ノ婦ニシテ、感覺敏捷ナル者ナリトイウヲ以テ、コレヲ考フレバ、我ガ巫蠱ノ類ト相同ジキコトヲ知り。(『気海観瀾広義』卷十三)

ちなみに、明治初期の『医語類聚』(1872)には、蘭学資料には見えない「悪液質、象牙質、灰白質、白堊質、発酵質」などが訳語として掲出されている。蘭学資料の三字漢語が姿を消して、後部一字語基「-質」の造語機能だけが受け継がれていったようである。

8. まとめ

今回の調査では、7種の蘭学資料から792語(異なり語数)の三字漢語を抽出した。このうち、語数が圧倒的に多い2+1型三字漢語を検討の対象とし、さらに、前部二字語基と後部一字語基に分けて、それぞれの性質を見ていくことにした。検討の結果については、次のようにまとめられる。

- (1) 前部二字語基と後部一字語基は、三字漢語の構成要素として、それぞれ違う特徴を持っている。前部二字語基は、種類が豊富なだけに、1語基あたりの平均造語数が約13語である(表4)のに対して、後部一字語基は、種類が比較的少なく、1語基あたりの平均造語数が約7語(表6)と多くなっている。したがって、三字漢語の造語に関しては、入れ替わりが激しく、臨時性が強い前部二字語基よりも、安定的で、語構成上の法則性をとらえやすい後部一字語基が、中心的な役割を果たしていると思われる。
- (2) 前部二字語基について、いくつかのパターン(表5)に振り分け、漢籍語との影響関係を調べてみた結果、「3字出典あり」と「2字出典あり」の三字漢語は、それぞれ全語数の13.1%と64.7%を占め、合計で77.8%に達している。つまり、前部二字語基の8割近くは漢籍に出典が見られるもので、残りの約2割は蘭学者による造語ということになる。一方、後部一字語基も、漢籍で一字語または二字語の構成要素として使われていたものがほとんどである。この意味で、蘭学資料の三字漢語は、

語基レベルからの造語が少なく、漢籍から既成の二字語基と一字語基を借用して、これを三字漢語の形に結合させるという、二次的造語の方式によって造られたものが相当多かった。このような二次的造語の方式は、日中の近代語彙の発達において、概念の語彙化や造語法の進化に大いに貢献したといっても過言ではない。

- (3) 今回の調査では、前部二字語基と後部一字語基がそれぞれ漢籍で使われていたものにもかかわらず、中国語では三字漢語の構成に至らなかったのに対して、日本語では三字漢語の用例が多数見られた事実が明らかになった。なぜ、漢籍の文章では三字漢語の生成が難しいのに、蘭学資料では三字漢語ができやすいのか、その原因を究明しなければならない。当面、幕末の蘭学資料とほぼ同時期に出版された在華宣教師の漢訳洋学書を取りあげ、この類の資料における三字語の使用状況を明らかにした上で、日中双方の比較対照を行なうことが課題となる。

参考文献（発表年次順）

(i) 蘭学資料を中心とした語彙研究

- 斎藤 静 (1936) 「和蘭語の日本語に及ぼした影響」『明新』(福井県立福井中学校校友誌).
- 斎藤 静 (1957-58) 「現代科学用語の語源 (1)-(3)」『科学史研究』43・44・45.
- 古田東朔 (1957) 「洋文典における品詞訳語の変遷と固定」『香椎湯』3: 1-18. 福岡女子大学国文学会.
- 杉本つとむ (1961) 「近代日本語の成立—洋学との関連において—」『国語学』46: 52-68.
- 古田東朔 (1963a) 「訳語と翻訳文体」『国文学 解釈と教材の研究』8(2): 85-91.
- 古田東朔 (1963b) 「幕末・明治初期の訳語—『民間格致問答』を中心として—」『国語学』53: 28-38.
- 斎藤 静 (1967) 『日本語に及ぼしたオランダ語の影響』東京: 篠崎書林.
- 杉本つとむ (1967) 『近代日本語の新研究—その構造と形成—』東京: 桜楓社.
- 吉田 忠 (1980) 『蘭学における訳語の考察』(文字と言語研究資料6). 特定研究「言語生活を充実発展させるための教育に関する基礎的研究」文字と言語班.
- 佐藤 亨 (1980) 『近世語彙の歴史的研究』東京: 桜楓社.
- 松井利彦 (1981) 「〈簡単〉〈明確〉の周辺」『国語国文』50(5): 39-55. 京都大学文学部国語学国文学研究室.
- 湯浅茂雄 (1982) 「蘭学資料の語彙—『舎密開宗』の用語を中心として」佐藤喜代治(編)『近世の語彙』(講座日本語の語彙第5巻): 365-388. 東京: 明治書院.
- 高野繁男 (1982) 「蘭学資料の語彙—『訳鍵』の語彙について—」森岡健二・宮地裕・寺村秀夫・川端善明(編)『現代語彙との史的対照』(講座日本語学5): 279-295. 東京: 明治書院.
- 高野繁男 (1983) 「医学用語における語基と基本漢字—『医語類聚』の訳語—」『人文学研究所報』17: 57-70. 神奈川大学人文学研究所.
- 高野繁男 (1984) 「明治期・医学用語の基本語基と語構成—『医語類聚』の訳語—」『人文学研究所報』18: 3-19. 神奈川大学人文学研究所.
- 松井利彦 (1987) 「漢語の近世と近代」『日本語学』6(2) (特集・漢語): 25-36.
- 朱 京偉 (1997) 「『植学啓原』と『植物学』の語彙—蘭学資料と中国洋学資料の比較という視点から—」『明海日本語』3: 33-57. 明海大学日本語学会.
- 沈 国威 (2000) 『植学啓原と植物学の語彙—近代日中植物学用語の形成と交流』吹田: 関西大学出版部.
- 杉本つとむ (2003-08) 「近代訳語を検証する (連載1-63)」『国文学 解釈と鑑賞』68(7)-73(11).
- 高野繁男 (2004) 『近代漢語の研究—日本語の造語法・訳語法』東京: 明治書院.
- 蘇 小楠 (2004) 「中国における日本製化学用語の受容—20世紀初期の中国資料を中心に—」『名古屋大学国語国文学』94: 134-148.
- 蘇 小楠 (2005) 「日中学術用語交渉の一試論—訳語〈固体・気体・液体〉の由来について」『名古屋大学国語国文学』96: 70-86.
- 蘇 小楠 (2006) 「日本化学用語の形成—『舎密開宗』の化学用語を中心に—」『語彙研究』4: 43-53. 語彙研究会 (愛知学院大学文学部).

- 木村秀次 (2006a) 「自然科学用語の意味転用—蘭学者の造語の中から—」『日本語と日本文学』43: 1-12. 筑波大学国語国文学会.
- 木村秀次 (2006b) 「〈風化〉の語誌」『国際経営・文化研究』11(1): 194-178. 淑徳大学国際コミュニケーション学会.
- 沈 国威 (2007) 「蘭学の訳語と新漢語の創出」内田慶市・沈国威 (編) 『19世紀中国語の諸相』: 217-261. 東京: 雄松堂出版.
- 湯浅茂雄 (2007) 「蘭学・英学における翻訳法と日本語」『実践英文学』59: 29-40. 実践女子大学.
- 阿川修三 (2008) 「翻訳語〈蒸気〉の形成についての試論」『言語と文化』20 (創立20周年記念号): 1-20. 文教大学言語文化研究所.

(ii) 現代日本漢語の語構成研究

- 山田孝雄 (1940) 『国語の中に於ける漢語の研究』東京: 宝文館.
- 池上禎造 (1954) 「漢語の品詞性」『国語国文』23(11): 92-101. 京都大学国文学会.
- 斎賀秀夫 (1957) 「語構成の特質」岩淵悦太郎・林大・大石初太郎・柴田武 (編) 『ことばの体系』(講座現代国語学Ⅱ): 217-248. 東京: 筑摩書房.
- 森岡健二 (1969-70) 「日本文法体系論 連載10-14 (語基と接辞)」『月刊文法』昭和44年9月号-昭和45年3月号.
- 宮地 裕 (1973) 「現代漢語の語基について」『語文』31: 68-80. 大阪大学国文学研究室.
- 野村雅昭 (1973) 「否定の接頭語〈無・不・未・非〉の用法」『ことばの研究』4 (国立国語研究所論集4): 31-50.
- 野村雅昭 (1974) 「三字漢語の構造」『電子計算機による国語研究Ⅵ』(国立国語研究所報告51): 37-62.
- 野村雅昭 (1978) 「接辞性字音語基の性格」『電子計算機による国語研究Ⅸ』(国立国語研究所報告61): 102-138.
- 野村雅昭 (1981) 「近代日本語と字音接辞の造語力」『文学』49(10): 22-34. 岩波書店.
- 水野義道 (1985) 「接尾の要素〈-性〉〈-化〉の日中対照研究」『待兼山論叢』19 (日本学篇): 3-19. 大阪大学文学部.
- 荒川清秀 (1986) 「-性・-式・-風」『日本語学』5(3) (特集・接辞): 85-91.
- 水野義道 (1987) 「漢語系接辞の機能」『日本語学』6(2) (特集・漢語): 60-69.
- 山下喜代 (1997) 「字音形態素〈~式〉の機能」『青山語文』27: 167-179. 青山学院大学日本文学会.
- 山下喜代 (1998) 「字音形態素〈~風〉について」『青山語文』28: 151-162. 青山学院大学日本文学会.
- 朱 京偉 (2002) 「構成要素の分析から見る中国製漢語と和製漢語」『日語学習と研究』第4期: 17-31.
- 山下喜代 (2003) 「字音接尾辞〈化〉について」『紀要』44: 119-132. 青山学院大学文学部.
- 小林英樹 (2004) 『現代日本語の漢語動名詞の研究』東京: ひつじ書房
- 朱 京偉 (2004) 「四字詞内部结构的な中日比較」『日本学研究』14: 67-84. 北京日本学研究中心.
- 朱 京偉 (2005) 「三字詞内部结构的な中日比較」『日語研究』3: 200-216. 商务印书馆.
- 朱 京偉 (2006) 「中日V+N動賓结构二字詞的比较」『関西大学視聴覚教育』29: 95-107.
- 朱 京偉 (2007) 「中日V+N定中结构二字詞的比较」『日語研究』5: 193-214. 商务印书馆.

(iii) 明治期資料・漢訳洋書を中心とした語彙研究

- 森岡健二 (1969) 『近代語の成立—明治期語彙編』東京: 明治書院. (1991改訂 語彙編).
- 広田栄太郎 (1969) 『近代訳語考』東京: 東京堂出版.
- 齋藤 毅 (1977) 『明治のことば—東から西への架け橋』東京: 講談社.
- 鈴木修次 (1978) 『漢語と日本人』東京: みすず書房.
- 松井利彦 (1979) 「近代漢語の伝播の一面」『広島女子大学文学部紀要』14: 95-105.
- 松井利彦 (1980) 「近代漢語の定着の様相」『広島女子大学文学部紀要』15: 49-60.
- 鈴木修次 (1981) 『日本漢語と中国—漢字文化圏の近代化』(中公新書626) 東京: 中央公論社.
- 柳父 章 (1982) 『翻訳語成立事情』(岩波新書189) 東京: 岩波書店.
- 鈴木修次 (1983) 「嚴復の訳語と日本の〈新漢語〉」『国語学』132: 40-50.
- 松井利彦 (1983) 「近代日本漢語と漢訳書の漢語」『広島女子大学文学部紀要』18: 35-51.
- 松井利彦 (1984) 「明治初期の法令用語と造語法」『広島女子大学文学部紀要』19: 27-47.
- 松井利彦 (1985) 「漢訳『万国公法』の熟字と近代日本漢語」『国語と国文学』62(5): 67-77. 東京大学国語国文学会.
- 佐藤 亨 (1986) 『幕末・明治初期語彙の研究』東京: 桜楓社.
- 惣郷正明・飛田良文 (1986) 『明治のことば辞典』東京: 東京堂出版.

- 杉本つとむ (1991a) 「近代、日・中言語交渉史序説—一方以智『物理小識』を中心に—」『国文学 解釈と鑑賞』56(1): 186–204.
- 杉本つとむ (1991b) 「物理学用語の翻訳とその定着—『物理階梯』から『改正増補・物理階梯』へ—」『国文学研究』105: 67–78. 早稲田大学国文学会.
- 沈 国威 (1994) 『近代日中語彙交流史』東京: 笠間書院.
- 沈 国威 (1996) 「近代における漢字学術用語の生成と交流—医学用語編 (1)」『文林』30: 59–94. 神戸松蔭女子学院大学国文学研究室.
- 沈 国威 (1997) 「近代における漢字学術用語の生成と交流—医学用語編 (2)」『文林』31: 1–18. 神戸松蔭女子学院大学国文学研究室.
- 荒川清秀 (1997) 『近代日中学術用語の形成と伝播—地理学用語を中心に』東京: 白帝社.
- 飛田良文・宮田和子 (1997) 『十九世紀の英華・華英辞典目録』ICU語学科飛田研究室.
- 沈 国威 (2000) 「『泰西人身説概』(1623) から『全体新論』(1851) まで—西洋医学用語の成立について—」『関西大学中国文学会紀要』21: 1–18.
- 陳 力衛 (2001) 『和製漢語の形成とその展開』東京: 汲古書院.
- 松井利彦 (2002) 「漢訳語の日本語への受容—漢訳『万国公法』の〈責任〉の場合」『文林』36: 21–45. 神戸松蔭女子学院大学国文学研究室.
- 朱 京偉 (2003) 『近代日中新語の創出と交流—人文科学と自然科学の専門語を中心に—』東京: 白帝社.
- 千葉謙悟 (2010) 『中国語における東西言語文化交流—近代翻訳語の創造と伝播』東京: 三省堂.
- 李 漢燮 (2010) 『近代漢語研究文献目録』東京: 東京堂出版.

朱 京偉 (ZHU Jingwei しゅ きょうい)

北京外国語大学日語系教授。博士 (文学・関西大学)。

2000年7月～2001年3月, 国立国語研究所招聘研究員。2009年10月～2010年10月, 人間文化研究機構国立国語研究所客員教授。

主要著書・論文:

『近代日中新語の創出と交流—人文科学と自然科学の専門語を中心に—』(2003年, 東京: 白帝社)

「19世紀以降の中日語彙交流と借用語の研究—研究の資料と方法をめぐって—」北京日本学研究中心編『日本学研究12』(2003年)

「日中漢語の交流」至文堂『国文学 解釈と鑑賞』(2005年)

「『清議報』に見える日本語からの借用語」『漢字文化圏諸言語の近代語彙の形成—創出と共有』(2008年, 関西大学出版部)

「『民報』(1905–08) 中的日語借詞」北京日本学研究中心編『日本学研究19』(2009年)